

た」…と叫ぶ。疲れていない証拠である。そのうち静かになり荒い息づかいだけが聞えてくる。岩清水で喉を潤し満足げに微笑み、時では「大変だったね」「よく登って来たね」と互の労をねぎらい合う。やがて樹間に尾瀬沼が見える。光っている。静かである。ウアーと歓声をあげながらかけるように下りて行く。湖岸でNさんの説明。が生徒はポカンと口をあけ放心したように沼をみている。沼沿いの道は暗くじめじめしている。その中にカラマツ草の白い花が浮ひあがるように咲いている。長葎小屋に着いた時は太陽はかなり西に傾いていた。小屋付近の大江川湿原は例年なら日光キスグの花で埋めつくされているのに今年はまばらである。7月初旬のおそ霜にやられたのだそうだ。ワタスグやサギスグもまたみすぼらしい。

スカートにはきかえバスタオルを抱えて風呂に行く生徒は「何よその恰好、だめ」と一喝される。両手に抱え切れぬ程お土産を買い込んできた生徒は「明日もあるんですよ。重いなんて言たって知りませんよ」と言われて首をすくめる。……こんな生徒にどうなっているのかと首をかしげあきれ果てる。

5時起床の予定を、あの歩きぶりではと4時にたたき起す。4時20分出発。グズな生徒にしては上出来である。朝靄の中から沼が浮ひ出して来る。水ぎわのフトイやミズガンツが音もなくゆらいている。声もなくじっと見いる。そして深い溜息をつく。沼尻川沿いの木道を黙々と歩く。白砂湿原をすぎブナ林に入る。やがて視界が開け正面に至仏山が姿をみせる。いよいよ尾瀬原である。ここでNさんの尾瀬原の説明。くいいるように原をみつめている。

原の一隅を山吹色に埋めつくす日光キスグ、食虫植物にしては白く可憐な花をつけているナガバノモウセンゴケ、黒紫色の何ともさえぬクロバナノウゲ、トキの羽の色から名付けられたトキ草……池塘の中には、未の刻になると花をとじるヒツジグサ、丸い葉をのんびりと浮かせボツンボツンと黄色の花をつけるオゼコウホネ…と次々に花をゆびさすけれども、生徒はあまり関心を示さず、たゞ申し訳け程度に「ヘイ」と言うだけ。そして専ら俗界の噂をし、思い出したように「足の裏が痛い」「こんなに歩くとは思わなかった」「早くバスにのりたい」とブツブツ言う。全くあきれたものである。

上田代で昼食をとっていると雲ゆきがどうもあやしい。早々に引上げ、1時すこし前鳩待峠に到着。途端、雷鳴と共にすさまじい雨。「早く出てよかったわね」と顔を見あわせる。

ここに登場する生徒は中学1、2年生で、高校生は黙々とよく歩き、説明にはよく耳を傾け、なかなか立派なものである。しかしこの中学生も9月の教室で、尾瀬の美しさを、自分達の強行軍を「すどく」「すどく」を連発しながら、誇らしげに語っていた。(5回生)

## 人間文化研究科に入って

小玉 美意子

昨年の6月29日、わがお茶の水女子大学博士課程の人間文化研究科は開講しました。本学はじめ

ての博士課程とあって、これまで勉強したいとおもいながらはたせなかつた人たちが、このときばかりあつまってきました。全部で13人の学生は25才から39才にわたり、既婚者9名、うち子ども4名。大部分はいわゆる学校制度からはなれて何年かたっているのです、よくいえば青くさがなく、わるくいえば世間ずれしています。

入学してこの仲間たちの顔をながめたとき、わたしはおもわずニヤッとしました。そうです。これこそわたしがもともとめていたものなのです。いままでの日本の教育にかけていた、つめこみでもおしきせでもない、自分がしたいときしたい勉強をする体制が、ここに実現したと思ったのです。桜蔭会報にも、この博士課程は女子の生涯教育と深いかわりを持ち、女性にとって研究しやすい環境づくりをするという意味のことが書いてありました。

ほんとうにいまの世の中で女性がなにかをするのは並大抵のことではありません。官庁や会社はもちろん、大学などの研究機関でも、一日のほとんどの時間をそのことだけにつかえる人にあうように、社会のしくみができているのですから、終身雇用制で夏の休みも十分にとれない競争社会では、こどもをうみ、そだてるための休暇など、あまりかんがえられてもいませんし、たとえあっても、それは脱落を意味します。

このことは研究者とて例外ではありません。学問の成果そのものには男女の差別はなくても、その成果をもたらすための環境にはおおきなひらきがあります。ひとが3年でするところを6年かかれば劣等者とみなされて、その後の就職や研究条件にもひびいてくるでしょう。いまは昔とちがって清貧の学者はそだちにくく、才能と努力のほかに財力によっても研究ののびる時代ですから、これはその後の発展に影響します。女子が社会参加したいとかんがえたとき、せおっているおおきなハンディ——それ自身、社会のかんがえかたがかわれば、女子がおわなくてもよいものがおおいのですが——をかろくし研究しやすくしようとのねらいでつくられたこの学科は、わたしたち女性にとって、とてもありがたいとおもいます。

それだけに、この人間文化研究科をつくられた先生方のご苦勞は大変だったと拝察いたします。理想を絵にかくのは簡単でも現実にぶつかると事情はちがうからです。その困難な現実には、わたしたち13人が入学して、さらにおおきくなったことでしょう。あるひとはこどもが熱をだしたといってやすみ、あるひとは妊娠中で気分がわるかったりします。また、わたしのように、ほかに仕事もちながら勉強したいという欲ばった希望をもって先生方を困惑させるものもいます。でもこれらを次元がひくいとして、きりすててしまったのでは問題はすこしも解決しませんし、また従来の男中心の大学の域をでないでしょう。なまなましい現実に対処しながら、そういう実感をふまえたうでの研究こそ、わたしたちに課せられたものではないかとおもうのですが……。

現在の人間文化研究科で、ことがすべて理想的にすすんでいるというわけではありません。でもそういう理想は、ひとがホイと投げしてくれる性質のものではありませんので、試行錯誤をくりかえしながらも、わたしたちが力をあわせ、先生方に協力しながら、みんなで作っていったらと、おもっています。勉強中のかたも、ふたたび研究にもどりたいというかたも、このあたらしい研究科に参加して、なにかをつくりだしてください。